

「農業農村工学分野の ICT 研究を始めるヒント」を読んで

農業農村部で ICT を用いた農業を展開するには田舎への高速通信インフラが導入されることが必要であった。スマート農業という言葉が広がっていく中で、私は農村部でスマート農業が広がらなく、言葉だけが先行していると感じており、その要因として私は、技術力の不足や利便性が上がるアイデアの実現が金銭面で難しいことだと考えていた。しかし、そもそも田舎にインターネットが整備されていないことが問題であることを知った。それは農村振興局が全て行えばいいわけではなく、総務省による ICT の基盤整備が必要であることがわかった。また、記事に記載されている 3. (2) に興味を持った。それは老人の意見に左右され、閉口してしまうことへの批判である。古い考え方に囚われているままでは進歩することはなく、若い人たちの意見や行動がなければ ICT を用いた農業は普及しないことがわかった。しかし、若い人たちの意見がどれほど反映されるのかは疑問に感じた。実際にあまり反映されていないことによって、スマート農業などの普及の滞りが起こっているのではないだろうかと感じた。

「スマート農業の死角」を読んで

スマート農業は「ロボット技術や ICT (情報通信技術) を活用して超省力・高品質生産を実現する新たな農業」と農林水産省によって定義されている。現在の日本で問題となっている農地の放棄、少子高齢化、担い手不足等の問題を解決するために、スマート農業が実現することは非常に重要なことで合った。しかし、スマート農業実現にはいくつかの問題があり、その一つとして、技術を開発、研究し、普及しようとする人たちに対して、実際に農業をしている普通の農家にはスマート農業に対する知識の差が存在し、導入するメリットや方法等を曖昧にしか理解していない点である。そして、画期的な農業ロボットの開発を行ったとしても、最終的に問題となるのは通信インフラ整備が行き届いていないことであることがわかった。また、スマート農業を展開し、効率の良い農業を行うには広い農業用地が必要であることがわかった。普通の農産物を広い農地で作ろうとすると、他国に劣ってしまう。よって日本が目指すべきなのは小回りの利く家族農業を支援するスマート農業であることを知った。それがどのようなものを指すのかはあまり想像できないが、通信インフラが整備され、農作物を遠隔で監視、水やり、状態等をデータで管理できるような仕組みは担い手不足や一人当たりの農地の拡大には貢献するだろうと考えた。